



Title	多言語社会タンザニアにおける言語問題の所在 : 英語化現象と多言語主義の狭間で
Author(s)	沓掛, 沙弥香
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69639
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (沓掛 沙弥香)	
論文題名	多言語社会タンザニアにおける言語問題の所在: 英語化現象と多言語主義の狭間で
<p>論文内容の要旨</p> <p>急速なグローバル化に伴い、英語は世界中に広がっている。「グローバル化」の名のもとに起きている英語への一極集中化（以下、「英語化」）は、否定できない現象となっている。一方で、1990年代以降ヨーロッパを中心に世界的な潮流となっている多言語主義の波もまた、アフリカ諸国に影響を与えている。</p> <p>英語化現象という「現実」と多言語主義という「理想」の間には乖離がある。本論文は、この乖離がアフリカ諸国に与えている影響に着目し、多言語社会タンザニアが抱える現在の言語問題を明らかにしたものである。</p> <p>第1章では、英語化現象と多言語主義に関するそれぞれの議論をまとめ、先行研究に指摘されるアフリカ諸国への影響を明らかにした。アフリカ諸国においては、これまでフランス語やポルトガル語が優勢であった地域においても英語志向の高まりが指摘されており、顕著な英語化現象がみられることが報告されている（Kamuwangamalu, 2010; Daudo, 2011; Fonyuy, 2010など）。一方で、アフリカが「目指すべきもの」としてヨーロッパから移入された多言語主義も、1990年代以降アフリカ諸国の言語政策に影響を与えている（米田, 2012b; 柘植, 2009; 砂野, 2007など）。しかしながら、多言語主義が「ヨーロッパ性」を内包したまま無批判に移入されている状況が、アフリカにおける多言語主義的政策を非現実的なものとしている状況がある（米田, 2012b; 砂野, 2007など）。</p> <p>本論文で事例を扱うタンザニアにおいても、1997年に採択された文化政策に多言語主義の影響を見ることができる。しかし、この文化政策で掲げられた民族語やスワヒリ語に関する政策は象徴的な宣言として留まっている。第2章では、タンザニアの詳しい言語状況を明らかにし、先行研究の状況を概観した。これらの先行研究には、①現在の民族コミュニティにおける言語使用の実態把握の欠如、②農村部の調査における2つの視点の欠如、③教授用言語に関する学校調査における事例の偏り、という3つの問題があった。また、タンザニアの言語政策は各時代の背景に合わせて変化を続けているため、常に新しく検討される必要がある。</p> <p>そのため、本論では、まず第3章において、独立後から現在までのタンザニアの言語政策の変遷を、それぞれの年代区分の社会的背景をふまえて明らかにした。タンザニアでは近年英語偏重主義的言説が公的領域でも私的領域でも目立っているとされていたが、現在は再びスワヒリ語振興政策が見られる。第3章では、現在進められているスワヒリ語振興政策の背景に、多言語主義の影響がある可能性を指摘した。</p> <p>さらに、第2章で明らかにした先行研究の3つの問題点を補うために、タンザニア南部地域の地方都市および農村部で、言語使用に関する調査、言語態度に関する調査、教授用言語に関する実態調査の3つのフィールド調査を行い、その結果を分析した。言語使用調査に関しては359人、言語態度調査に関しては70人への聞き取り調査を行った。教授用言語に関する実態調査では、小学校8校、中学校3校において教師たちへのインタビュー調査（小学校教師22人、中学校教師6人）と参与観察を行った。また、首都都市ダルエスサラームにおいて、私立学校で教育を受けた経験のある人や自分の子どもを教授用言語が英語の学校に通わせている人への聞き取り調査（合計4人）を行った。</p> <p>第4章の言語使用に関する調査結果では、タンザニア南部の農村部においても、若年層以下の世代ではスワヒリ語を第1言語とする傾向が見られ、「家庭」のような民族語の使用が優勢と考えられた領域でも、スワヒリ語の使用が優勢になってきていることが明らかになった。また、農村部のような英語の使用の必要性が日常的に皆無と考えられる場所においても、あえて「英語使用」を申告する人が見</p>	

られた。民族語に関しては、人々は「民族語を使用し続けている」という意識があるが、その民族語そのものはスワヒリ語に大きく影響を受けている。

第5章の言語態度調査においては、農村部においても英語偏重主義的な言説が一般的となっている状況を明らかにした。さらに、農村部においてもスワヒリ語が「母語」的言語としての位置づけを確立していると言える状況が見られることを指摘した。また、人々は民族語に対して、「民族そのもの」「文化である」という意識を持ちながらも、それを教育には持ち込みたくないという態度を共有していることが明らかになった。

第6章の教授用言語に関する実態調査では、都市部のみならず農村部の小学校においても、子どもたちは就学前からスワヒリ語の運用能力を身につけている場合が多いことがわかった。また、都市部に比べて劣悪な農村部の公立小学校の教育環境が子どもたちの教育的達成に影響を与えていることが明らかになった状況もある。特に都市部の私立小学校との比較から、その差は歴然である。先行研究では、人々の意識の中で、私立小学校が比較的良質な教育を提供していることが、私立小学校が英語を教授用言語とすることと関係付けられて認識されることで、「英語＝教育」という意識が強化されていると指摘されている（Rubagumya, 2003; Bakahwemama, 2010など）。筆者の調査においても、ある地方都市のスワヒリ語を教授用言語とする私立小学校が、優秀な成績を修めているにも関わらず入学希望者の減少に悩まされ、教授用言語の変更を決定する事例がみられた。本質的な問題は教育の質にあるにも関わらず、「英語＝教育」という見方の浸透が進んだ結果、「教育の質」が高いスワヒリ語の学校までも否定される状況になっている。また、中学校以上の教育では、教授用言語は英語であるとされているが、英語だけで授業を行うことは不可能であることを多くの教師が認めている。そうであるにも関わらず、校内で「英語オンリー」の規則が維持されている状況が生徒と教師のコミュニケーションをいびつなものにしているという状況もある。

これらの結果をふまえて、第7章では、現在タンザニアで見られるスワヒリ語振興政策の背景に英語化現象と多言語主義の影響があると位置づけて分析を行った。アフリカの社会言語学的研究においては、「アフリカ諸語のエンパワーメント＝英語への抵抗」という見方が当然のように行われてきた。そのため、現在のスワヒリ語振興政策が多言語主義的政策と位置づけられ称揚される傾向がある。しかし、実際には英語の地位に変化を迫るものではなく、むしろ言語権の観点から問題が指摘されるものであることを明らかにした。

第8章では、第5章での議論をふまえながら、多言語主義の風潮の中で発展してきた言語権の議論が、タンザニアにおける言語に関する人権としてなにを語り得るのか、その射程を明らかにするための議論を行った。タンザニアにおいては、優先されるべき言語権はスワヒリ語の習得と使用、および英語の習得であり、民族語の権利は「プラスアルファの権利」として位置づけた。近年では、学校が提供できる教育が粗悪な状況であるために、英語だけではなくスワヒリ語の習得にも懸念が見られるような事態になっている。また、英語は「外国語」として扱われている側面がありながらも、公用語として中学校以上の教育の教授用言語であり続けている。そのため、英語を習得する権利もまた、タンザニアにおいては言語権の議論における優先的課題となる。一方、民族語に関しては、第5章で見た人々の民族語への態度をもとに、現在の民族語の使用の規制を撤廃し、民族語が社会的に認知されることで「自分たちの民族語に肯定的な態度を持つことができる権利」を人々に保障するという観点からの議論が必要であることを指摘した。

このようなタンザニアの事例をアフリカの言語問題の新たな局面の一部として位置づけ、英語化現象が顕著なアフリカ諸国における多言語主義が「価値」として機能しない要因を改めて考察し問題提起を行ったのが第9章である。多言語主義がヨーロッパ的な文脈を内包し続けることにより、アフリカ諸国で従来見られた「多言語使用による多言語状況の管理」（砂野, 2007）を不可能にしている状況がある。それどころか、アフリカ諸語が置かれた状況を改善しないままそれらの言語への強い結びつきが強調されることで、不平等な状況の固定化から逃れたいアフリカの人々を英語へと駆り立てているとみることもできる。さらに、近年では、多言語主義的な文脈で位置づけられてきた母語教育が、英語を習得するためのマルチリンガル教育に取り込まれるかのような傾向も見られる。そこでは、教育におけるアフリカ諸語の使用は、英語習得のためのステップであるかのように扱われるため、アフリカ諸語と英語の間の言語格差が強化されることが懸念される。このような多言語主義の流用が続けば、その理念はますます形骸化してしまうことになるだろう。

タンザニアの言語問題は、英語の価値の高まりと多言語状況の称揚という2つの世界的潮流の影響を同時に受けながら、新たな局面を迎えている。このような状況は、おそらく他のアフリカ諸国にも共通するものであるだろう。「英語を選択しない」という選択肢が現実的に選択できなくなった一方で、多言語主義のヨーロッパ性を相対化し、再検討する作業はいまなお十分ではなく、アフリカ諸国における多言語主義の価値は画餅でありつづけている。英語化する世界において、アフリカの多言語状況を生きるすべての人が言語的に排除されないために、「多言語主義」はどのような理想を語り得るのだろうか。アフリカの現実としての多言語状況が、現代的文脈においてどのような変化を迫られているのかという視点からその具体的な言語状況を明らかにするためのさらなる研究が喚起される。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (沓掛 沙弥香)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	言語文化研究科・教授 米田 信子
	副 査	言語文化研究科・教授 竹村 景子
	副 査	言語文化研究科・教授 岡本 真理
	副 査	言語文化研究科・教授 山下 仁
	副 査	熊本県立大学 ・教授 砂野 幸稔

論文審査の結果の要旨

本論文は、公用語である英語とスワヒリ語の他に120以上と言われる民族語が重層的に共存している多言語社会タンザニアの現在の言語状況を現地調査から明らかにし、その背景を世界的な「英語一極集中化」という現象と「多言語主義」という理想の交錯として捉え、そこから引き起こされている問題について論じることを目的とするものである。

本論文は3部からなる。第1部は、先行研究をもとに、世界の潮流とタンザニアの言語状況をまとめている。第1章では、英語一極集中化（論文中ではこれを「英語化現象」と呼ぶ）と多言語主義に関する議論をまとめ、それらがアフリカ諸国に持ち込まれている状況について概観している。第2章では、タンザニアの言語状況に関する先行研究を検討し、そこに見られる傾向や問題点、また補完されるべき点をまとめることで、本論文の位置づけを示している。

第2部はタンザニアの言語政策と筆者による現地調査の結果とその分析である。第3章では、独立後から現在までのタンザニアの言語政策の変遷をそれぞれの社会的背景と照らし合わせながら概観している。第4章から第6章では、筆者がタンザニアで約7カ月にわたって行った現地調査の結果を示すことで、現在のタンザニアの言語状況を明らかにしている。第4章では言語使用に関する調査、第5章では言語態度に関する調査、第6章では教授用言語に関する調査の結果が示されている。

第3部では、第2部で明らかになったタンザニアの言語状況が直面しているさまざまな矛盾を、英語化現象と多言語主義という世界的な潮流に位置づけて考察している。第7章では、現在タンザニアで見られるスワヒリ語の振興政策の背景について議論している。ここでは、英語化現象と多言語主義という相反する状況に対応するために、「民族語としてのスワヒリ語」と「国際語としてのスワヒリ語」というスワヒリ語の二面性が使い分けられると主張している。第8章では、多言語主義の風潮のなかで展開されてきた言語権の議論がタンザニアの文脈ではどのように適用されるべきなのか、また何をその射程にすべきなのかを論じている。ここでは調査結果を根拠にして、タンザニアにおいて優先されるべき言語権はスワヒリ語の習得と使用および英語の習得の機会の確保であり、民族語の権利は「プラスアルファの権利」として位置づけている。第9章では、そこまで述べてきたタンザニアの事例を、アフリカの言語問題の新たな局面の一部として捉え、多言語状況が「理想」ではなく「現実」として存在するアフリカ諸国において、多言語主義が「価値」として機能しない要因を再検討している。最終章となる10章では、多言語主義が英語化へ収斂されるという現実の矛盾を指摘し、「英語を選択しない」という選択肢を選択することが現実的ではなくてきている状況のなかで、アフリカの多言語状況を生きるすべての人が言語的に排除されない「多言語主義」のあり方に対する問題提起で締め括られている。

本論文の最も高く評価できる点は、350人以上にもおよぶ被験者を対象とした綿密な調査によって得られた具体的なデータを提示し、そのデータから自分なりの方向性をしっかりと導き出していることである。タンザニアのなかでも特に開発が遅れていると言われている南部地域の農村部で、一から調査ルートを切り開き、現地の人びとと信頼関係を築き、これだけのデータを収集することがいかに大変なことであったか想像に難くない。データには、インタビューだけでなく、長い会話データも含まれるが、緻密なこれらのデータは資料としての価値も高いと思われる。特にベナ語話者やキング語話者の会話のデータは、スワヒリ語のコード・ミキシング（あるいは民族語のコード・ミキシング）が実際にどのように起きているのかを示す大変興味深いものであり、言語データとしても非常に貴重なものである。

また、タンザニアの言語状況に対する新たな視点も高く評価できる。タンザニアの言語状況に関するこれまでの研究は、スワヒリ語と民族語、あるいは英語とスワヒリ語という2言語間の相克に焦点が置かれていたのに対し、本論文は「グローバル化に伴う英語一極集中化の現実と『多言語主義』という理想との乖離」という新たな視点からタンザニアの言語のあり方を捉えている。また英語一極集中化はこれまで都市部に見られる現象であるとされ、農村部での現状は明らかにされてこなかったが、本論文は農村部においても英語化現象が見られることを現地調査から明らかにした。タンザニアの言語状況に関する先行研究は決して少なくないが、沓掛氏はそれらの先行研究を丁寧に読み解き、しっかり検討がなされている点も評価できる。この検討が適切にできていたからこそ、先行研究の問題点および更新すべき点を明らかにし、本論文がやるべき点を明確にすることができたものと思われる。

一方で、これだけのデータを集めたにも拘らず、第7章、第8章の議論の根拠としてそれらを十分に活かしきれていないところがあるのも否めない。そのため具体的なデータを提示しつつ分析結果を示してきた第6章までに比べると、その後の議論については根拠がやや弱くなってしまった。また、第3章でタンザニアの言語政策の変遷が述べられているが、本論文の重要なポイントにもなる最新の政策が2015年に採択された背景の説明が十分でなかったのは残念である。

しかしながら、これらの課題を残しつつも、緻密で具体的なデータを提示しつつ主張に行きついた本論文は、タンザニアが抱える言語問題を明らかにするにとどまらず、アフリカ社会言語学に新たな知見を与えるものであり、アフリカに限らず多言語社会研究に広く貢献するものであることは疑う余地がない。十分に博士論文に値するものであり、論文審査担当者全員一致で「合格」の結論に達した。